



長尾和宏(ながおかずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

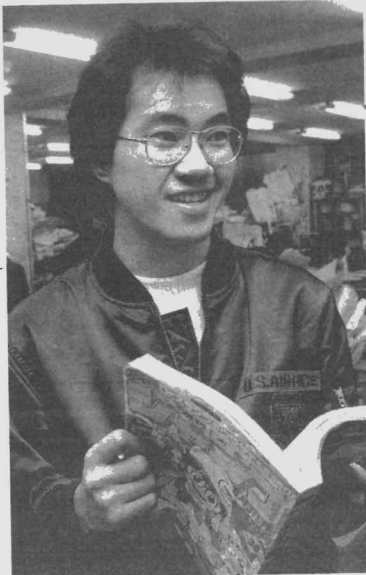
347

漫画家 鳥山明

世界中が作品に元気をもらった

在宅医療と聞くと、おじいちゃん、おばあちゃんの顔を思い浮かべると思いますが、実際の患者さんは高齢者だけではありません。昨今、新生児医療の目覚ましい進歩によって高度な医療ケアを必要とする子供が増えています。子供の成長を病院ではなく自宅で見守りたい…親御さんの想いをサポートするため、小児在宅医療の拡充が求められています。

僕も昨年町医者を卒業するまで、小児を何人も在宅で診ていました。男の子の部屋を訪ねると、必ずと言っていいほどあったのが、『ドラゴンボール』のかっこいいキャラクターグッズ。己より何倍も身体の大きな敵にも怯まずに立ち向かい、投げ飛ばされても何度でも立ち上がる主人公・孫悟空の姿は、外で友達と遊ぶことも、学校で勉強するのも難しい子供



たちに大きな夢と力を与え続けてくれたはずで。

その作者である鳥山明さんの突然

の訃報でした。3月1日に死去されていました。享年68。死因は急性硬膜下血腫との発表です。

硬膜とは頭蓋骨の内側にある脳を覆っている膜のこと。交通事故や転倒や殴打されるなど、硬膜と脳の隙間に血液が短時間で溜まる病態を急性硬膜下血腫といいます。多くの場合、強い外傷を受けた直後から意識障害や頭痛や吐き気などの明確な症状が現れます。手術ができて半数以上の人が亡くなってしまいうる病態です。

一方、高齢者においては軽微な打撲から少し時間がたってから(1週間~2カ月程度)徐々に尿失禁、歩行障害、認知機能障害などの症状が出現する慢性硬膜下血腫という病態も時々経験します。なかには外傷歴が不明な場合もあり、認知症と間違えられることも。診断さえされれば血腫除去術で比較的容易に治癒可能

です。

報道によれば、鳥山さんは「2月に脳腫瘍の手術をする」と周囲に話されていたようです。その手術を行ったのかどうかは定かではありません。新作の予定もあり、まだまだ作品を描く意欲にあふれていたようです。

今、この原稿を書いているのは3月11日。13年前の春、鳥山さんは東日本大震災の被災者に向けて、孫悟空とアラレちゃんを描いた応援動画を「Get together and Help T OHOKU, Japan!」というメッセージとともにYouTubeにアップ。その広告収益を全額被災者に寄付したといっています。

一体、どれだけの子供たち、いや大人たちもが鳥山さんの作品に元気をもらったことでしょうか。中国からも欧米からも追悼の言葉が寄せられるなんて、わが国の政治家たちよりよほど世界平和に貢献しているのでは? 鳥山さんが育んだ世界との懸け橋を、どうか壊さぬようお願いしたいです。